

伯母金成マツのもとへ

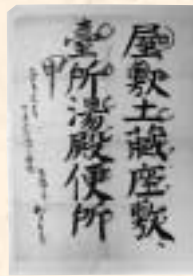
幸恵6歳の秋、旭川の近文ちかぶみの日本聖公会で布教活動をする伯母金成マツに預けられ、祖母モナシノウクとの三人暮らしが始まります。祖母のモナシノウクはユーカラクル(ユーカラを語る人)で、『アイヌの最後の最大の叙情詩人(金田一京助評)』といわれました。

このことが幸恵のアイヌ語の習得に多大なる影響を及ぼしました。

高等科第一学年時の褒状
(読方綴方)



幸恵(尋常小学校4年時)の習字



女子職業学校時代の幸恵



幸恵の文学碑
(旭川市1990年建立)



祖母モナシノウク

書かねばならぬ、

知れる限りを、

生の限りを

〜金田一京助との出会い〜

1918年(大正7年)夏、アイヌ語学・アイヌ文学研究の先鋭である金田一京助はユーカラなどを収集するため、ジョン・バチラーの紹介で旭川・近文にモナシノウク、マツを訪ねた。

この一夜の様子を金田一は次のように記している。

「今から7・8年前の夏、私が旭川郊外の近文のアイヌ部落を始めて訪問した折、バチラー老師のお口添えで部落のはづれのアイヌ教会に金成マツさんをおとづれた。もう日の暮れであったから話しているうちにちぎに夜が更けた。けれども教会はマツさんと、おばあさん(モナシノウク)と養女の幸恵さん(当時16歳程、旭川の女学校の1年生ぐらい)と女三人の所帯だから。」(金田一京助 大正15年7月10日)

次頁へ



母ナミ(左)、金田一京助(中)、金成マツ(右)



金田一京助が幸恵にあてたはがき